

恋の舞台はお屋敷で

Y u r a & S b u

伊東悠香

Yuka Ito

termity



エタニティ文庫

目次

恋の舞台はお屋敷で

5

ジェラシーに隠れたスイートハート

249

恋の舞台はお屋敷で

1 無職の風と出会い

「あなたサイテーですよ！」

私の声がフロアに響きわたったこの瞬間……私の未来に嫌な雲が見えた。

「何だその言いぐさは！」

年齢を重ねてもわりとイケメン……と、自ら豪語している上司は顔を赤くして怒っている。でも私は一步も引かない。

「もう我慢できません。あなたがしている事は女性を侮辱するものですよ。セクハラです！ それをサイテーと言って何が悪いんですか」

「このっ……！」

上司と睨みあつて対峙する私を、同僚はオロオロして見ているばかり。

（あーあ……、やっちゃった）

こんな思いが無かつたわけじゃないけれど、もう自分の我慢も限界だった。

そもそも……ここまで私が耐えたのは奇跡だったかもしれない。上司にたてついた事

を正当化するつもりはないし、それなりの制裁を受けるのは覚悟の上だ。

最近の会社はセクハラが随分減ったと聞く。でも、私の勤める会社ではそれはまだ健在で……以前からそれとなく反撃はしていたものの、うちの課長は全くそれに気づいてる気配がなかった。

数日前までの私は、そりゃあもう修行僧のように心頭を滅却して彼のセクハラに耐えていた。仕事を失ったら給料がもらえなくなる。今の私には何よりお金が必要だ。

だから……ものすごい我慢をして仕事を続けていたんだけど……

「やあ、倉田くん。調子はどうだい」

そう言って、なめるような目つきで、私のつま先から頭の先までを見る。

「おつかれさまです。特に問題ありません」

一応上司だ。失礼な態度は良くないだろう……そう思って、「その目つき止めてください」と言いたいのを我慢する。

「君はその、あれだね。足が非常に綺麗だね」

「そうですか？」

自分の足がジツと凝視されるのを感じつつ、平然としているのは結構つらい。

「制服のスカートがもう少し短いといいのだがね」

「やだ、課長！ それってセクハラですよ〜？」

「はっはっはっ。冗談だよ、冗談！ ま、頑張ってくれたまえ」
 怒りの握りこぶしが机の下に隠れているなど思いもつかない様子の課長は、毎日こんな調子で言葉によるセクハラを繰り返していた。

嫌だったけれど、ここで彼を怒らせても仕方ない……そう思って、私は耐えていた。我慢すればいいだけだと思っていたからだ。

でも、冒頭のように私はとうとう爆発してしまった。何故なら、今年入社したばかりの後輩が彼に身体的にもひどいセクハラを受けた事を知ってしまったからだ。

誰もいない更衣室で泣いていた後輩を見つけ、私は彼女から事情を聞いて驚愕した。

歓迎会の帰りに、送ると言われてタクシーで彼女の部屋まで行き、そのまま抱きしめられたりキスされそうになったりしたというのだ。

「何でその場で助けを呼ばなかったの!？」

「怖くて……声が出ませんでした」

肩を震わせる後輩を見て、私の中で何かがブチン！ と切れる音がした。

自分の事なら耐えられた。でも、後輩の話聞いて、我慢も限界に達した。

(私の可愛い後輩に何て事すんのよ!!)

怒りの炎がメラメラと燃え上がった。

それで……「あなたサイテーですよ！ 云々……」の事態になったというわけ。

課長はぶすつとした顔をしながらフロアを出ていった。あの様子だと私に何か復讐してくるに違いない……そう確信した。

そして、次の日。私の予想は見事に当たった。

部長から呼び出され、私の仕事ぶりが怠慢たいまんに見えるという事を言われたのだ。

「怠慢ですか？」

課長が何を言ったのか分からないけれど、私は「職務怠慢」のレッテルを貼られていた。「ああ、そうだ。課長から昨日報告があつたね。仕事中に私語が多すぎるとか、上司の言う事を聞かないとか……まあ、色々ね」

部長は私の仕事ぶりを買ってくれていると思っていた。課長の言葉なんかで私の仕事を疑ったりするような人じゃないと思っていたかった。だから、最初から課長の言い分を信じてしまっている彼を見てガックリきた。

「査定に響く報告なんでね。態度を改めてもらわないと困るな」

「私が、態度を……ですか」

私が毎日サービス残業しての知ってますか。

私が課長のミスをさり気なくフォローしての知ってますか。

具合が悪くなったって接客では笑顔を絶やさないし、キャバオーバーな仕事を断った事もありませんよ？

(そんな私に、職務怠慢って……)

男性社会はまだまだ健在で、私が必死に頑張っている事など誰も見てくれていなくて。若いとか、可愛いとか、お茶入れが上手いとか。そういうレベルでしか女性を見ていない。「……」

やるせない気持ちでいっぱいになった私は、思わずその場で「お仕事を辞めさせていただきます」なんて口にしていた。

(あわわ！ 何言ってるのよ、私。仕事辞めて、これからどうやって生きていくのよ！) 第二の私がそう言っただけで慌てているというのに、第一の私は頑として譲らなかつた。だから、部長が一度引き止めるような事を言ってくれたのに、私はあくまでも「退職しなす」という意志を貫いた。

こんなわけで、私は思いがけない展開で仕事を失う事になった。

「とりあず、落ち着こう。今月いっぱいは一応仕事できるわけだし」

自分のデスクに戻り、手をくしゃくしゃ揉んだりして深呼吸をする。

家に帰って苦勞のし通しの父に仕事を失う事を打ち明けると考えると、身体全体が重だるくなってくる。受験勉強に精を出す高校生の弟はまだまだ育ちざかり。お金は多ければ多いほどいい……そんな状態を私は嫌というほど分かっている。

そう……私は母を早くに亡くし、父子家庭で育っている。貧しいながらも愛が溢れる

素敵な家庭で育ったと思っている。それでも、真面目過ぎるがゆえに万年平社員を貰く父の給料だけでは大変で……私も家計の半分近くを支えている。

だから、会社には内緒でメイド喫茶の店員のアルバイトもこっそりやっていたりする。ここでアルバイトをするようになったのは本当に偶然の事だった。

あれは一年ほど前。

その年はボーナスカットとかで、いつにも増して家計が苦しかった。ある日、疲れて休める喫茶店を探していた。すると、目に入ってきたのは……喫茶は喫茶んだけど特別なお客様が入りそうなメイド喫茶だった。

「メイド喫茶かあ。私が入る場所じゃないかあ……」

そうつぶやきながら、メイドのアルバイト募集のチラシをほんやり見た。年齢制限が若干気になったけど、やってやれない事もないかな……なんて思った。

(アルバイトをして、年末年始はもう少し明るく迎えたいなあ)

こんな思いで、私はメイド喫茶に足を踏み入れた。店内はなんとなくもやっとした空気が漂っていて、メイドの嗜好をした可愛い女性と会話している男性もいるし、もくもくと雑誌を読みながらフルーツパフェを食べている男性もいる。パッと見たところ女性客はいない。

「お帰りなさいませ！ お嬢様！」

どう見てもまだ二十歳くらいの女の子に声をかけられた。

「あ、あの……外に出ていたアルバイト募集のチラシ見たんですけど」

「え！ アルバイト希望ですか？」

「は、はい」

私が頷くと、彼女はバアツと顔を晴れやかにして店の奥に走っていった。

「店长〜！ 新人さんです〜!!」

その大きな声に、客も私の方をざっと見る。

やがて、店の奥から黒いドレスをまとった迫力ある女性が出てきた。何だかこの子の姐さんみたいな風格がある。

「あなた、うちで働きたいの？」

「えっと……外にアルバイト募集って書いてあったんで」

「履歴書持つてんの？」

「あ、コピーでよろしければ」

私はこういうときのために履歴書をコピーして持ち歩いていた。書く必要がある事態になったら、ただちにそれを清書できるように……それくらい副業に関しては本気でやる気になっていたのだ。

タバコの煙をフーツと吐いて、履歴書を手にした店长らしき女性は軽くそれに目を通した。

「ふうん。それで？ あなたOLやってるみたいだけど、バイトなんてやっていいの？」

「言いつらいですけど……お給料が低いんで。隠れてバイトしたいんです」

「なるほどねえ。せちがらい世の中だものね」

私の境遇にやや同情を示しつつ、店长は履歴書から目を上げた。

「年齢がギリギリって感じだけど、メイド服は似合いそうな顔してるし……いいわよ。

早速今日から働いてちょうだい。マリちゃん、この子に色々教えてやって」

「はい、店长！」

私を最初に出迎えてくれたマリちゃんがいかにも先輩らしく店内を案内してくれた。アラサアの私を着るにはちよつと恥ずかしいフリフリのミニスカート。何故か脳波を察知すると耳が動くという猫耳なんかもつけられた。

「カワイー！ ユラさん可愛いですよ〜」

「そ、そうかな？」

「うん。これなら絶対顧客つきますよ」

私よりずっと可愛くて若そうなマリちゃんに励ましてもらうと、余計自信が無くなるのは私の心が弱っていたせいだろうか。

こんないきさつで、私は仕事が終わってからの数時間をメイド喫茶で働いている。稼いでいるお金は月額五万円程度で……まあ、大金とは言えないけど。ここまで働いて、やっと弟を大学まで上げてやれるかどうかという家庭の経済事情。

(だから本業を失うわけにはいかなかったのに!!)

神経の図太い私だけれど、さすがに動揺している。やりかけの仕事をやってみようとしても、何だか画面がよく見えない。

「倉田さん、具合悪いの?」

隣の席の社員が、私の様子がおかしいのを見て声をかけてくれた。この人にはいつも仕事をフォローしてもらったりして、大変お世話になっている。

でも、今の私の悩みを話すわけにはいかない。

〃会社に絶望して退職します〃なんて言えるはずもない。

「いえ、なんでもありませんよ。ちよつと仕事に行き詰まってるっていうか……気持ちを切り替えたいんで、外の空気吸ってきますね」

戻ったばかりのデスクを離れ、ペランダに出てため息をつく。

放心状態から軽い苛立ちに気持ちしがシフトしてゆき、このイライラをどこにぶつけていいか分からない。

課長のいない隙に彼のデスクを蹴^けってみただけど、足が痛いだけだった……

二十八歳にして、まさかの無職。ため息をつくときと幸せが逃げるというけど、今の私からこれ以上どんな幸せを奪うっていうのよ!

「あ、コーヒーでも買ってくればよかったな」

喫煙の習慣でもあれば、ここで一服して気持ちを切り替えるんだらうけど、私にはそういう習慣がない。そうやって切り替えて次に進むなんてできないし、正直^{〃器用〃}とは対極にいるような人間なのだ。これは両親の教育のためもの……

我が家の家訓三条 〃不器用でも正直であれ〃 〃一宿一飯の恩を忘るべからず〃 〃貧しくても愛のある生活を〃。心優しい両親は、確かに貧しくても愛のある素敵な家庭を築いていた。だから私はこの家訓を深く胸に刻んで生きている。

ここでの仕事だって、アルバイトから入って、ようやく三年前に正社員にしてもらったばかりなのに。努力を認めてもらって嬉しかったし、多少きつくても好きな仕事だからって思ってた張っていた。なのに……

(ああ……心が折れそうだあああ)

私はさしずめ飢えた捨て猫みたいな状態だ。次の餌い主を探してさまよい歩かなくなはならない。

「うんにゃー!」

パシパシと自分の頬を叩き、気を引き締める。

「くよくよしてもしょうがない。腰を据えて次の仕事探すぞ！」

落ち込みそうになる気持ちを正して、帰路につく。

私の長所はこのポジティブシンキングだ。何かガツカリする事が起きても簡単に折れっぱなしにはならない。へこむ日でもないではないけど、ネガティブからは何も生まれなくてという信念が自分の中にある。

だから、この逆境をバネにして、さらなる飛躍を狙うのだ。

そうは言っても、この事実を告げるのが心苦しい人もいる……父だ。

「お父さんが聞いたら、驚くだろうなあ」

失職した事は今のところ父に内緒だ。ただでさえ真面目で心優しい父。私が仕事を失ったと知ったら倒れてしまうかもしれない。そんな親不孝はしたくない。

新しい仕事が決まったら知らせようと思っっている。

「姉ちゃん、家事は心配しなくていいから。仕事頑張っって見つけてくれよ」

事情を知った弟からの言葉。

「健太……」

いつの間にか頼もしくなった彼の言葉に涙が出そうになる。

健太は私が仕事を探している間、家事全般を引き受けると言ってくれた。健太の頑張

りにも応えなくてはならない。

「姉ちゃん頑張るからね！」

こうして私は通常出勤とアルバイトにプラスアルファで新しい職探しというハードな日々を過ごす事になった。

家族との時間が少なくなっていくのは寂しかったけれど……これが大人になるという事なのかもしれない。

私が職探しの手始めにやった事。それは普通の人が当然やるだろうハローワークの門を叩く事だった。

実のところ、次の仕事はそんなに苦労せずに見つかると思っていた。働く事に対する情熱には自信があったし、体力もあるし……そんなに高い条件は望んでいない。

でも……

「募集定員一名ですが、今のところ応募者四十三名になっております」

「は？」

私が吟味に吟味を重ねた企業への応募者数が天文学的数字（少々オーバーか）で、私は目を丸くした。

フレックスタイムを使って朝一番でハローワークに駆け付けた私を待っていたのは、

そりゃあもう北極グマすら驚くほどの凍てつく就職事情だった。

「どうしますか？　まだ募集は打ち切りになってないようですから……」一応〴〵履歴書を送ってみますか？」

ハローワーク職員の眼鏡の奥がキラリと光り、〴〵どうせ無理だろうけど〴〵と思われるような気がした。

「はい。そうですね……」一応〴〵紹介状お願いします」

ややうなだれつつ、その不可能と思われる仕事へ応募してみることにした。

他にも数件ビックアップしてあつたけど、もう決まってしまったと電話で断られたり、新卒を優先的にとつてるから難しいとか……まあ、色々な事情で応募するにも至らなかつた。

（うおおお！　何なのこの大氷河期は。私が学校を出た頃より悪くなつてるんじゃない？）

発行してもらつた紹介状を見つめながら、自分が考えていたよりずうーっと再就職が厳しい事を実感した。

まあ、結論を言うと、この紹介状を出してもらつた企業は書類選考で落ちた。理由は分からない。〴〵後のご活躍をお祈りしております〴〵の文句にはプチ切れそうになつた。

「お祈りしてもらわなくて結構です！」

封書を自室の机に叩きつけ、肩で息をする私……相当格好悪い図だ。

「ああ……お母さん、ごめん。お父さんにまた負担かけちゃうかもしれない」

天国にいる母に、私は時々泣き言を言う。

母は私が中学の時に他界している。それ以来母がやっていた家事は私の仕事になつた。部活もやつてたし、まあ……普通に考えると結構ハードだったのかもしれないけど、それをつらいなんて思つた事はない。

もともと世話好きな性格だから、不器用ながら父や弟のために料理するのも掃除するのも苦じゃなかつた。

それでもこの世は努力をした人が必ず報われるとは限らない世界で。真面目に働いていた父の会社が倒産し、仕方なく私たちは都会に出る事になつた。不景気とはいえ、仕事の数は都会の方が圧倒的に多いからだ。

〴〵不器用でも正直であれ〴〵

これを貫く父は、都会でサラリーマンをやつても万年平社員で給料はほとんど上がらない。それで自然に私がかが家計を助ける事になつただけ……今回、自分の短気でとんでもない状態になつてしまった。

（いくら正直であれ……とは言つても喧嘩までしろとはお父さん、言っていないよ）

かなり痛い事をしてしまった自分を再度責めてみるけど、そんな事をして空しいば

かり。

「ああ……ハローワークは駄目だ」

五社目の企業からお断りの手紙をいただいた時、私は本気で未来が真っ暗になるのを感じた。

もう会社では私が退社するのは知られており、事情を知らない人は寿退社だと思っている。「おめでとう！ お幸せにね」なんて言葉をいただいた日には、力なく笑って見せるだけで精いっぱい。それを「違うんです」と言う気力は残っていないかった。

部長も課長も私が啖呵たんかを切って辞める事になった事情は伏せているようだ。気遣いなのか何なのか分からないけれど、今の私にはどうでもいい事だ。

（どっちにしろ無職になることは変わらないんですけど……まあ、皆さんお気遣いありがとうございます）

ありがたいようなそうでもないような、不思議な感覚だ。

（ややこしいこと考えずに生きていた昔が懐かしい）

フラッシュバックのように、小学生だった頃の自分が頭の中をよぎる。川は澄んでいてキラキラ光っている……空はため息をつくほど高く青い。

あの世界で私は確かに幸せだった。愛があつて笑顔があつて……のびのびしていた。（何が違うんだろう。田舎暮らしの方が苦労は多かったはずなのに）

きつと……今、生きづらいと思っっているのは愛がないからではなく、お金がないからだ。その事に思い至り、ガツカリした。

（貧乏で苦労するのは別にかまわないんだけど、健太が進学したがつているのを諦めさせるような事はしたくない。何とかしなくちゃ）

弱気になって何もかも嫌になってくるけど……家族のためだと思えば満身創痍まんしんそうじゆうの私でも再び立ち上がる力が出てくる。

（私がへこたれたら家族全員共倒れだわ！）

人間案外ピンチになったらなつたで何とかするものだ……少なくとも私には今のところ健康という宝がある。

（身体を張ってでも何か職を見つけてやる！）

悲愴な思いを胸に秘め、ギリギリまで就職活動をしたけど。……結局いい職は見つからなかった。

そして、ついに……ついに退職の日がやってきてしまった。

「みなさん、今まで大変お世話になりました」

ペコリと頭を下げた私に、みんなにこやかに手を叩いてくれている。

「おめでと！ たまには遊びに来いよ」

「いいなあ。私も早く結婚したい」

こんな見当違いなセリフがいくつか飛び交った。それをポーカーフェイスで聞いている部長が、「まあ、倉田さんならどこでも歓迎してもらえらるだろう」なんて適当な励ましをくれた。

もうため息も出ない。
笑うしかない。

「ありがたいございます。これからも元気に私らしく頑張ります！」

自分でもよくできたなと思うほど最高のスマイルを見せて、十年間お世話になった会社にお別れを告げた。

父にも嘘をつき通せず、職を失った事を告げ……全力で再就職に向けて動いている事を報告した。

「まあ……ユラはまだ若いんだし。そう焦らなくても見つかるだろう」

「そうだね」

樂觀できない事は父も分かっていたはずだけど、こう言っただけで、私の気持ちを軽くしてくれようとしたんだろう。何だか……逆に猛烈な罪悪感とプレッシャーが！

「はあ。ダメもとでネットサーフィンでもしますか」

無職一日目にやったのは、ネットサーフィン。ハローワークを諦めた今、頼れるのは

インターネット情報だけだ。

それでもなかなか自分に合った仕事は見つからない。

「気分転換しよう」

職探しに疲れたら、お気に入りのブログが更新しているかどうかをチェックする。そして最後にやるのが占い。これを見ると結構その日の自分の行動が決まったりするから、やっている。

「ええと、なにに……いて座のあなたは……」

〃いて座のあなたは、残念ながら今日は大凶です。行動する時は熟慮じゆくろしてくださいね〃

この占いで、私の頭痛はいつそうひどくなった。

(これ以上どんな不幸が襲ってくるっていうのよー！)

悲鳴に近い心の叫び。

ただでさえ不安に押しつぶされそうなのに、自分で不安をおおるようなことをしてしまつた……こういうのを墓穴ほけつつていうんだろうか。

でも、大凶が出たからといって、一日寝てるわけにもいかないし……とにかくあまりいい日じゃないことを意識して動くことにしよう。

気をとりなおして、私は職探しの旅に出た。

ハローワークでは応募者が多すぎて振り落とされてばかり。インターネットで探して

も怪しげなものばかり。こうなったら自分の足で歩いて、募集広告を出しているところはないか探すことにしよう。

これはまさに「旅」だ。

あてどもなく、自分の生活を支える仕事を探す旅。結構シビアなこの状況。書き溜めた、たった数枚の履歴書がやけに重い。

いくつかお店に飛び込みで自分を売り込んだけど、どこも「間に合ってます」と断られた。薬局での店員募集は比較的多かったけど、やはり薬剤師免許を持ってないとダメみたいだ。

（うう……お金がないからって大学には行かなかったけど。お父さんが言った通り、資格くらいは何かとおけばよかったかなあ）

父は将来の事もあるし、青春を謳歌（おうか）するのもいいし、金の事は気にしないで大学に行けと言ってくれたけど……私は父に負担（おん）をかけるのが嫌ですぐ就職した。

だから、大学に行かなかった事を今更嘆（なげ）いても仕方ない。

「仕事……見つかるのかなあ」

その夜、悲しみを癒（い）すために、私は初めて入るバーで強めのアルコールを飲んでた。一人で酒なんて柄（がら）じやないのは分かっていたけど、ほとんどやけくそだ。そんな私に、声をかけてきた人がいた。

「ねえ、君さ」

「はい？」

頭を上げて、その声のする方を見る。

相当カッコいい部類に入る男性が目の前で微笑んでいる。

（酔ったせいで視覚がおかしくなった？）

そう思ったけれど、いくら見つめても相手は消えない。どうやら現実のようだ。その相手は再び口を開いた。

「一人？」

「はい。一人でですけど……」

「偶然！ 僕も一人なんだ」

そう言つて、彼はすつと横に座り、自分の飲んでたお酒を席まで持ってこさせた。どうもこの人は常連らしく、店員もスムーズに動いている。

「可愛い女性が一人で飲んでいるなんて。声をかけずにはいられないじゃない」

こういう誘われ方をしたのは初めてで、らしくないと思いつつ顔が赤くなってしまう。「あのさ、ここのラウンジの上ってホテルでしょ。最上階にもバーがあつてさ……すく夜景が綺麗なんだよ。行ってみない？」

一気にグラスを空（か）にして、その男性はそう誘ってきた。

「夜景……」

酔いで頭がうまく働かない。最上階に展望室でもあるのだろうか。

グラグラした頭で何て答えようか考えた。

「でも、私もうお酒は……」

「お酒は飲まなくていいからさ……景色見るだけでも得した気分になるよ?」

「はあ……」

言われるまま私はバーから連れ出され、エレベーターに乗せられた。

「ほらぐらついている。これじゃあ、今は帰れっこないよ」

肩を抱かれ、私の中で「危険なのでは?」という気持ちがあつと胸に湧いた。

「あの、やっぱり帰ります」

「つれないこと言わないよ……この俺が相手をしてやるって言ってるのに」

「でも……」

ハッキリ断る前にエレベーターのドアが閉まりかけた。その時……

ガツツと音がして、誰かの足がエレベーターが閉まるのを阻止した。

一度閉まりかけたドアがスツツと開いて、目の前には一人の男性が立っていた。

「シユウ、何の用だよ」

シユウと呼ばれた男性は私のボケた頭で見ても分かる美形で、そんな綺麗な男性がす

ごみを利かせて私をエレベーターに乗せた男性を睨んでいる。銀色の髪をしていて、かなり日本人離れた風貌だ。

「とりあえずエレベーターを降りろよ」

「……」

しぶしぶ……という感じで、男性は私とエレベーターを降りた。

「その人怯えてんじゃない……通報しよつか?」

（何て綺麗な男性なんだろう……）

危険が目前に迫っているというのに、私はのんきにこんな感想を抱いていた。

「野暮な事言うなよ。お前には関係ないだろ」

「いや、この人はうちの家政婦だ。関係ないわけじゃない」

（は? 家政婦?）

私はきょとんとしていたけれど、美形は全く動じないで本当の事を言っているような迫力だった。

「へえ……お前の家ではこんなうら若い女を家政婦にしているのか。じゃあ、もちろんお手つきなわけだ」

「……ああ。頭の前からつま先まで、すっかりお手つきだ」

嫌な空気が流れる。まるで、私が課長とやりあった時のような空気だ。

「てめえ……マジで生意気だな、前からお前にはムカついてたんだよ」

私をナンパ（？）した男性が押し殺した声でそうつぶやいたけど、美形は全くひるむ様子はない。

「殴るなり蹴るなり自由にすればいいさ……弾みで自分の骨が折れてもいいならな」それを聞いて、男性は一度振り上げかけた拳を震わせながら下ろした。そして、脱力した表情に変わり……か細く笑った。

「やれやれ……天下のシユウ様がお怒りだよ。別の場所で飲み直すか……じゃあな」そう言つて、彼はホテルを出ていってしまった。

「……」

残された私と美形との間に妙な空気が流れた。

私を家政婦と称した美形男が軽蔑の眼差しを向けている。人形かと思えるほど、どこもかしこも整っていて、ダークグレーのその瞳はキラキラして吸い込まれそうだ。

そんな王子様みたいに素敵な容姿をした彼が、信じられない言葉を口にした。

「あんた……バカか？」

「バ、バカ？」

あまりにもその容姿と出た言葉にギャップがあつて、私は目を大きく見開いた。

「まあ、あんたもあいつとやるつもりだったんなら、邪魔したな……つてとこだけ」

「いえ。私は何も……」

私がハッキリしないせいか、彼は深いため息をついた。

「関係ないからスルーしようと思つたけど。あんた、酔っぱらつてたし、明らかに戸惑つた顔してただろ？」

「……」

超ぶつきらほうだけど、親切心で私をあつ男性から引き離してくれたみたいだ。家訓不器用でも正直であれ、というのは、こういう場面で使うのかな。てことは……これは、お礼を言ったほうがいいのかな。

「それはどうも……」

「別に」

私の言葉をさえぎるように、男性はやや強めの口調で言葉を繋げた。

「え？」

「おひとよしつてのは、あんたみたいなのを言うんだらうな。あんま簡単に他人を信用すんな」

さつき助けてくれた人とは思えないほど凍てついた言葉だった。

美形だけど、この人……全然笑みが浮かばない。常にこんな冷たい顔をしてるんだらうか。

でも……どこか寂しげな陰があつて、何故かこの人を包んであげたいような変な気持ちになつた。

「でも、あなたは私を助けてくれた。それは事実でしよう?」

と言つても、美形は容赦なく冷たい言葉を続ける。

「俺をいい人とか思つてんの? 単純だな……勘違いすんなよ」

そう言われたとたん、私の頭の中で何かのスイッチが入つた。納得いかなない言葉を聞くと、言い返さずにはられないこの性格……

「……おひとよしはどつちですか」

私の言葉に、彼は少し驚いた表情を見せた。

「私が危険な目にあつていたので助けてくれたいい人ですよ、あなたは……」

「はあ? 何言つて……!」

美形が何か言つていたけど、私の耳にはもう彼の声は届かなかつた。

「……床が歪ゆがんで見えます……」

酔いが身体中に回つていたのか、私はそのまま気を失つてしまった。

その夜。夢の中に、久しぶりに幸せの木が出てきた……

小高い丘に一本どっしりと立つその木は、その頃住んでいた家からもよく見えた。

夢のなかで私は、母とその木の下で語っている。

「お母さん……私、自分の短気でまた家族に迷惑かけてる」

「何言つてるの、あなたは頑張つてるわ。お母さんちゃんと見てるもの」

夢の中の母は、私が幼かった頃の彼女で……若くて美しい。

私が中学生の頃までは母は元氣にしている、ちよつと不便な田舎いなかに住んでいた。だから今より自然豊かな川沿いのポロ屋で暮らしていて……よく川辺で釣つた魚や山で採れたものなんかを使ってバーベキューをした。

あの頃の風景は私の中に生きている。悲しい事があつたり、つらい事があると、必ず一本の桜の木の下に立つた。そこにいると何故か悩みが薄らいだり、つらい気持ちが消えたりした。

その木を私は「幸せの木」と呼んでいて、母と時々そこにランチを持って行って他愛ない話をしたりしたのだ。そんな思い出があつて、つらい時は時々この木が私を励ますかのように夢に出てくる。

「お母さん、この木は毎年私たちに幸せを運んでくれる木だと思つてるの」

「そうね……四月の満開の桜は本当に綺麗なものね」

「うん」

青く葉が茂つた桜の木を見上げ、私は満足げに頷うなづいた。そんな私を目を細めて見つめ

ながら、母は言った。

「姿は見えないかもしれないけど、私はあなた達の事ちゃんと見守ってるから……大丈夫よ」

そう微笑んだ母の姿が薄らいだ。

「お母さん、待つて！」

「大丈夫、お父さんの教えてくれた言葉通り生きていれば……必ず幸せになれるわ」

「お母さん！」

大声で起き上がると、そこはホテルの大きなベッドの上だった。

現状を把握できず、ズキズキする頭をかかえながら用意されていた水を飲む。すると、少し心が落ち着いて、昨夜の事が少しずつ思い出されてきた。

(……シヨットバーで飲んで。それで……あっ！すごい美形に助けられたんだった) 倒れる寸前の自分までは思い出せた。でも、その後はさっぱりだ。

衣類を見ても特に何かされた様子はない。

〃代金は払っておく。気分が良くなったら自由に帰っていいから〃という走り書きのメモと朝食バイキングの券が置いてあった。

「一宿一飯の恩……」

私の頭の中にはその言葉がグルグルと回っていた。

目立つ美形だった。私の記憶が確かなら、テレビでも一回か二回見た事があるような……かなりインパクトの強い容貌ようぼうだった。でも……この広い都会で彼を探すとすると……相当なホネだ。

(でも、この恩は何がなんでも返さなくては！)

運命つていうのがあるのかどうか分からないけれど……実はこの美形とは不思議な縁があり、再会するのは、そんなに遠い事ではなかった。

2 まさかの再会

この日は、頭が痛いままバイトに出た。二日酔いにはなりにくいタイプなんだけど、昨日はいろいろ考えながら飲んでいたらこんな事になったんだろう。

(どうしよう。朝食バイキングたらふく食べちゃったし……あの高級ホテルの宿泊代金調べたら、倒れそうなほど高かったし。やっぱり何とかしてあの美形を探し出さなければ)

こんなことを思いながらせつせとバイトに励む私。どうやって人探しをしたらいいのか考えていたら……店長に呼ばれた。

「ユラちゃん、ちよつと頼まれてくれないかしら」

店長は他のバイトの子に聞こえないよう、ヒソヒソ声で話し出した。

「何でしょうか？」

「ん〜……折り入ってユラちゃんにお願いしたい事があるの」

「はあ」

いつもは堂々としている店長が、何故かちよつと弱気な感じで話しているのが不思議でしょうがない。いったいお願いしたい事って何だろう？

「御堂家^{みどう}って知らない？」

「御堂？ いえ、知りません」

初めて聞く苗字だ。少なくとも私が応対したお客様の中にはそういう苗字の方はいなかった。

「そう。かなりの豪邸で、たまにテレビでも紹介されてたりするのよ？」

「そうですか」

私の気のない返事に、店長はちよつと不満そうだった。芸能ニュースに弱い私にはこんなリアクションしかできない。

「知らないならいいわ。それで、これは内緒だけどね。ここって私の妹の家なんだけど……あ、妹は女優やってるのよ。花園^{はなづか}カレン。知らない？」

「名前は……聞いた事があるような、ないような？」

私のあまりの反応の悪さに、店長はため息をついた。

「もういいわ。それでね、私は昔から妹とは仲が悪くて……あんまりコンタクトとってないのよ」

このどこぞの組の姐^{あね}さんみたいな店長にお金持ちの妹がいる。しかも女優。そのギャップに、ちよつと笑ってしまいそうになったけれど、それはグツと我慢した。

「そういう訳で、私自身はこの屋敷^{いせ}にあまり行きたくないんだけど、ここに可愛い甥っ子が一人で住んでるのよ」

「可愛い甥っ子ですか」

私の頭の中では、せいぜい中学生くらいの子が思い浮かんだ。屋敷に一人で住む中学生……ちよつと無理があるか？

「そう。妹も、その旦那も舞台俳優で、海外を飛び回ってるの。それで、日本にある屋敷には全然戻らないのよ。旦那がフランス人だね……正直、あっちが彼らの拠点なのよ」

「そうなんですか」

私には縁のない雲の上の人たちの話だ。でも、店長はかまわず話を続ける。

「だから、あの子が一人でちゃんと生活しているのかが心配で心配で……」

問題児を抱えた母のように悩む姿を見せる店長。

「それで、ユラちゃんに御堂家専属メイドになってもらいたいのよ。あなたなら年齢も聡彦あきひこより上だし、うまくやってくれるんじゃないかと思って」

「専属メイド……ですか」

「あと、条件は住み込み。食事のお世話まで全部してもらいたいから」

「ええ!? 私、実家住まいなんですけど」

「でも……ユラちゃん、正直仕事が無くて困ってるんでしょう?」

「……はい」

痛いところを突かれた。

「弾むわよ、これ♪ しかも、しっかりと月給で払うわ」

そう言って、店長は「銭」を示す輪っかを指で作って見せた。今の私には一番効果のあるジェスチャーだ。

う〜んと考える私。

「ね、受けてくれるわよね?」

店長の眼差まなざししは必死だ。

お父さんと弟が心配だけど、お金を弾むと言われると、心はグラリと揺れる。おまけに、私は店長には恩もあるし……無下むげに断るのもどうか。

「店長にとってはこの上なく大切な人なんですよね、その甥っ子さんは」

「そうよ。私のお店と同じくらい大切な」

私の年齢を考えて、密かに他の子より多い時給を払ってくれている店長。最初は厳しかったけれど、頑張ればちゃんと認めてくれた。そんな彼女への恩返しもしたいし。

何よりも……そのお屋敷専属メイドになれば「夢の月給制」になると言われたら、もうその誘惑には抗えなかった。メイド姿で働くのが主軸になるとは思っていなかったから悩んだけど、背に腹は代えられない。

「分かりました。御堂さんのお宅の専属メイドになります」

この言葉を聞いて、店長は緊張していた表情をスツと緩めた。

「よかったわ〜。ユラちゃんならお願いを聞いてくれると思ってたわ、ありがとう」

「いいえ。私でよろしければ、お役に立ちたいですから」

私も店長の笑顔に誘われてゆると笑った。来週から……とか、そういう話なんだろうなと思っていたその時。店長はスツクと立ち上がった。

「じゃ、早速さっさとなんだけど、今から行ってくれないかしら」

「今からですか!？」

あまりの急な展開に目を白黒させている私におかまいなしに、店長はタクシー会社に電話をかけ、「あと十分でタクシーが来るから、そのまま行ってちょうだい」と言った。

「ええ、この恰好かっこうで、ですか!？」

店内では確かに可愛い印象のメイド服だけど、これを外で着るっていうのは相当な抵抗がある。でも、店長は私に着替えることを許してくれなかった。

「着替えくらい実家に取りに戻らせてください」

「ううん、実家に戻ったら離れられなくなるでしょ」

「うっ……」

お父さんと弟の顔を見たら、確かに心細くなって行くのをためらう可能性はゼロじゃない。店長……さすがに痛いとこを突いてくる。

「着替えなんかは、もうお屋敷に一式そろえてあるのよ。渋る聡彦をせき立てて、メイド用に準備させた部屋もあるし……何の心配もないのよ」

(店長……食えない人ですわね！)

のど元までこんな言葉が出かかっていた。

私が専属メイドとして働く事は彼女の中で随分前から決定していたようだ。

「若い女の子なら、気難しい聡彦も少しは心を開くんじゃないかと思って」

フツツと笑って、店長は機嫌よくタバコに火をつけた。

今までの話に、その甥っ子が「気難しい」というのは出てこなかったはずだ。急激に不安になる。もしかして、めちゃくちゃ厄介な甥っ子なのでは!?

「あのっ!!」

私が不安の声を出す前にタクシーが到着してしまい……もう有無を言わせぬ感じで私はそれに押し込まれた。

「じゃあ、よろしく頼んだわよ！ 給料は弾むわ！ 一ヶ月に一回くらいは状況報告しなね」

ボタンと閉められたドアの向こうで、店長がそう叫びながら手を振った。

(二十八にもなつて、こんなロリコンめいた服装で外に出るなんて！)

恥ずかしさ一二〇パーセントだったけれど、もう後には引けない。行くしかないのだ……

その屋敷は、東京の一等地だというのに……立派に庭付きだった。

定期的に業者が入るようで、庭の木とか家周辺のゴミの処理とか……そこは完璧だった。だからこそ、家の中の荒れ具合には愕然がくぜんとした。

ピンポン。

ピンポン。

何度チャイムを鳴らしても出てこない家主。

「すみませーん！」

叫べども返事は無し。

しびれを切らして、ドアノブを回すとあっさり開いたのでそこから顔を突っ込んでもう一度声をかける。

「あの、メイド喫茶、ベイビー、から来ました倉田ですけど！ 御堂さん？」
結構大きな声で言ってみただけど、誰も玄関に出てくる気配がない。

（だめだ……これでも反応がないなんて。どういう家主なの？）
今日私に来るってことは知ってるはずなのに。

お金持ちなのにドアに鍵もかけないで、とても物騒だ。私は泥棒みたいにかっそりドアを開けて玄関に足を踏み入れた。

「入っちゃいますよ？ ……うわっ！」

何かが足にひっつかかって、私はそのまま玄関先で倒れそうになった。無造作にちらばったシューズにつまずいたようだ。

「ちょ……使う靴だけ玄関に出せばいいのに」

屋敷は立派なのに、整理整頓ができていない。

私は御堂聡彦という人物が何歳なのかという情報さえ与えられていない……嫌な予感
は消えない。

「いや、店長の可愛い可愛い甥っ子だもの。頑張らねば！」

（でも、あれだな……甥っ子可愛さに、私に無茶振りしてきたって可能性もあるなあ。

誰にも手に負えない問題児を押し付けられたんじゃないかな!?)

「あ……安請け合いですんじゃないかなあ」

軽く後悔しつつ、私はとりあえず玄関で脱ぎ散らかされている靴を片付けていた。

すると、ようやく二階から誰かが下りてくるのが分かった。ハッとして、音のする方に顔を向けると……

「……」

挨拶も忘れて、私はそこに立っていた男性をポカンとした顔で見上げた。

驚くほどバランスのとれた体形と綺麗な顔。絵本の王子様が抜け出てきたような男性。

「あ、あなたはこの前の！」

目の前にいたのは……正に、先日私をホテルで助けてくれた美形だった。

「あなた……この前の……何の用？」

無表情のまま彼はそう言って、鋭い眼差しを私に向けた。まるで外から敵が入ってきたのを警戒するような態度だ。

でも私の心は彼と会えた事で踊っている。

なんとというラッキー。こんな形で、一宿一飯の恩を返せるとは!!

私は、どんなに苦労しようとこの屋敷で働かねばという気持ちになった。

「私、倉田由良と申します。今日からこちらで住み込みのメイドの依頼を受けてまいり

ました！」

「……そういう依頼をした覚えはないけど」

「あのっ！ 喫茶ベイビーの店長から頼まれたんです」

そう言うと、彼は思い当たる節があるような表情をした。それでもメイドは特に必要ない……と言った。

「先日は助けて下さってありがとうございます！ ホテル代とか朝食とかお世話になつてしまったので……是非、その恩返しをさせていただきますいんです」

「別にそんな大げさな事じゃないから」

そっけなく去ろうとした彼を私はあわてて引き止めた。

「いえ！ お願いします。ここで働かせてください!!」

深く頭を下げて私はここで働きたいという気持ちを態度で示した。恩人を前にして何もせずに帰るわけにはいかないという必死の思いからだ。

そんな私の情熱が通じたのか分からないけれど、聡彦さんは冷たい表情のままため息まじりにつぶやいた。

「……好きにすれば」

私が居ようと居まいと関係なさそうな無関心な顔。心の中まで凍てついてるんだろうか、この人は。

(仕事をする前から心が折れそうだわ。でも……)

私だつて世間の荒波に採まれた経験もあるわけだし……簡単に音ねを上げるわけにはいかない。

「はいっ！ 好きなようにさせていただきます!! 精一杯頑張りますので。よろしくお願いします」

可能な限り好印象を持つてもらえるよう、謙虚な姿勢で挨拶をする。これは恩返しでもあり、家計を救う大切な仕事でもある。是非とも聡彦さんには気に入られなくては。

「おじゃまします！」

玄関に上がり、そのままリビングに凶々しく入る私。すると、窓際の鳥かごがユラユラと揺れた。鳥かごの中に、黄色いセキセイインコが一羽いて、せつせと羽づくろいをしてる。

「あ、インコ飼ってるんですね」

「うん」

家の事を全て任されると……この子のエサの世話もやるようになるんだろうか。そんな事を思いつつ、鳥かごをツンツンとつついてみる。

「可愛い。名前何ていうんですか?」

「ザンギ」

「変わった名前ですわねえ。ザンギってどういう意味ですか？」

「……鳥のカラ揚げ」

「ぶっ！」

小鳥を飼うなんて、案外可愛いじゃないのって思っていた気持ちが吹っ飛んだ。

家の中を簡単に案内され、私がフムフムと聞いていると、最後に彼はグッと私に顔を近づけて言った。

「ここでの仕事、嫌なら……すぐに言ってね」

彫刻みたいに整った顔が色っぽく吐息を吐くように語る。この熱にうっかりやられそうだったけど、……何とか冷静に言葉を受け取った。

「お、お気遣いありがとうございます。でも、そう簡単に嫌になったりしませんから」

「そう……しぶとい性格なんだ」

「はい、そうです」

お互いややひきつった笑顔のままりビングでらみ合い。

ちょっと取扱い注意なお坊ちゃま。この都会でこんな偶然に再会できたのは何か運命的なものすら感じてしまう。

相手は私を追い出す気満々だけど、私の方は使命感に燃えていて……簡単にここを去る事はできないと感じていた。

こうして始まった私のメイドライフ。これがなかなかどうして……思いもかけない展開が待っているとは。この時の私は知る由もなかった。

メイド初日の朝。

私の仕事は、庭に出てポストから新聞を取るところから始まった。

「今日の天気はどうだろうな……って、ん？」

天気予報を見るつもりで新聞をバサッと広げて……腰を抜かしそうになった。

「聡彦さん、聡彦さん！」

もう既に起きていて、ジョギングの用意をしていた聡彦さんが怪訝な顔で私を見る。

「声デカすぎ……」

「だ、だって。聡彦さんが、全面にドーンと載ってますよ!？」

私が新聞を広げて、その広告が出ているところを彼に見せた。決め顔で栄養ドリンクをさわやかに手にした聡彦さんが微笑んでいる。

「ああ。それ、今日新聞に載るんだったんだ」

他人事みたいにそう言って、彼はまた自分の作業を続ける。

「……聡彦さんって仕事何なんですか？」

広告の下のほうに「シユウ」と、書いてある。

そういえば、ホテルで助けてもらった時、相手の男性が彼を「シユウ」って呼んでいたのを思い出した。

「モデル。聞いてない？」

「はい」

私は知らなかったけど……何だか結構有名な人みたいだ。どうりで……テレビで見たような気がしたわけだ。

「そう。それから、俺の生活にはリズムがあるから……そこは仕事と違って付き合ってもらう事になる。あ、それと、『聡彦さん』って呼ぶのやめてくれる？」

トントンとシューズの履き心地を確認しつつ、彼は少し渋い顔をした。

「分かりました。じゃあシユウさんって呼びますね。あ、でも馴れ馴れしいですかね？」

「……別にいいけど……」

こんな淡白な言葉で私の疑問は片づけられてしまった。

この時の私は、恩人&有名モデルのお世話をする事になった自分を、こんな事もあるんだな、くらいにしか考えていなかった。

3 ♪ 聡彦の取扱説明書 による彼の一日

シユウさんは、まず朝五時に起きる。当然私はそれより前に起きなくてはならない。眠い目をこすり、朝のお茶を淹れ……彼がジョギングに出るのを見送る。

手には店長がザツとメモしてくれた ♪ 聡彦の取扱説明書 ♪ なるものが握られている。まあお金持ちのボンボンだから……気難しかったりするのだろう。

『注意！…目覚めにモーニングティーを淹れる事。雨の日はアッサム。晴れの日はダーズリン。微妙な日はブレンドで』

これがあるから、天気に神経質になってしまつて、日々のニュースで最重要視しているのは「明日のお天気」である。

「セカンドフラッシュを淹れなおしてくれる？」

晴れたからダーズリンだなど思つて、普通にそれを淹れたらこのお言葉。どうやら今のマイブームはセカンドフラッシュだったようで、説明書にあったファーストフラッ

シユブームは去ってしまったようだ。

(エスパードでもない限りシユウさんのご要望に応えるのは難しそうだなあ)
 そう思いつつ、頑張る私。シユウさんが雨の日も風の日もジョキングとトレーニングを怠らないのを見ていて、自然に応援したくなったというものもある。

『注意2…聡彦は卵命。卵の質・鮮度には要注意』

この注意事項を見逃していたため、最初の料理で文句を言われた。

「こんなもの口に入れられないな」

心を込めて作った料理。美味しくなかったのかな。

「何か変な味しますか？」

「別に、そういうんじゃないけど」

後で分かった事だけど、彼は私に来るまでほとんど卵だけで生活していたらしく……卵の味には相当うるさいみたいだ。中身の見えない卵の質を見極めろっていうのは、私には相当な難題だ。

でも弱音は吐けない。

そんなわけで、この日から私は「卵オタク」になってしまったのだった。

『注意3…ワインセラールの管理をしつかりする事。銘柄めいがらを間違うと大変な事になるので注意』

彼は食前酒としてワインを飲むのを好む。

ソムリエにチョイスさせたワインを、屋敷のワインセラールで管理していて、私は子供の世話をやくようにワインを一番いい状態に保つ努力をする。

「フルボディを頼んだつもりだけど。あんた耳壊れてる？」

軽く一杯飲みたいという言葉の方が耳に残ってライトな赤を用意してしまった。

(金持ちのボンボンってこんなものかなあ?)

野山で猿のように成長した私にとって、シユウさんの生活習慣は信じられない事の連続だった。

『注意4…聡彦はかなりのゲーム好き。対戦できるよう、それなりの実力をつけるべし』

モデルがゲームオタクだなんて……と、彼の趣味を知った時、やや意外だなと思った。私はもともとゲームなんかやらないから、シユウさんと対決したって勝てた試しが

ない。

「俺と互角になるまで練習して」

「分かりました……」

メイドの仕事に、ゲームの腕を上達させるなんて内容が含まれているのは私だけだ
と思う。それでもシユウさんの命令だ……やらざるを得ない。

「朝寝坊は三文の損」

「う……」

ゲームのしすぎで寝坊した朝……ベッドサイドに突然シユウさんが現れて言った。

「俺がジョギングする前に起きておいてって言ったよね？ 言われたことを守らないメ
イドは要らないんだけど」

「うう……ごめんなさい。頑張りますう……」

朝の五時前に起きる生活なんて今までしたことがないから、相当きつい。涙が出そう
になるけど、ここはグツと我慢して頑張るしかない！

「あんまり我慢しないで。嫌だったらいつでも出ていっていいんだからね」

嫌味っぽくこんな事を言われても私は石のように動かない。

「……出ていきません」

「ふん……本当にしぶといみたいだね」

立ち読みサンプルはここまで

あくまでもシユウさんは私をこの屋敷から追い出したいようだ。でも、私の恩返しは
まだ満足にできていない。シユウさんの意地悪さに負けるつもりもない。

だから、私は今のところ何があってもこの仕事を続けるつもりだ。

店長から受け取った彼の取扱説明書に忠実に従っているだけでは、あんまり意味が
ないように思えるこの頃。私はオリジナルな方法でシユウさんに追い出される事なく何
とか仕事をこなしている。

ここまで頑張っているのにはちゃんと理由がある。

最初はシユウさんって冷たい人かなっていうイメージで見えていたけど、案外優しいと
ころも見えたりして……ベイビーの店長が言っていたように放っておけない気持ちに
なっている。

彼のジョギングコースは私も買い物で通る道で、その道沿いにあるお地蔵様に向かっ
て彼は手を合わせている。

実は私もそのお地蔵様に、毎日綺麗な野の花を摘んでお供えするのが日課になってい
た。だから、彼が手を合わせているのに鉢合わせした時は、結構驚いた。

(シユウさんがお地蔵様にお祈りしてる……)

結構真面目に目をつむってお祈りしているみたいだったから声をかけるのをため
らった。